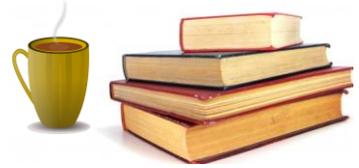


日本バプテスト連盟

性差別問題特別委員会

ニュースレター

第37号 2024. 3. 15



★日本バプテスト連盟のホームページでも読むことができます。

巻頭言：飽きるほど受けています

中條智子

私たちを憐れんでください。主よ、私たちを憐れんでください。蔑みは飽きるほど受けました。私たちの魂は飽きるほど受けました。高ぶる者らの嘲りを、傲慢な者らの蔑みを。
(詩編 123:3-4 協会共同訳)

あるオンライン会議での出来事。会議の議案の一つを担当者が説明をした。担当者は女性だった。質疑の時間になり、年配の男性が挙手をして質問をした。担当者は男性の質問に的確に応答した。ところがその男性は、鼻で軽く笑いながら、「説明を聞いたが、さっぱり分からないな」と発言した。これ以上どう説明すればよいのか。担当の女性が困惑するのを見て、助け船なのか、別の担当者（男性）が登場し、同じ説明を繰り返した。すると質問した男性は、「非常に明快に説明していただいて、大変よくわかりました」と、笑顔で答えた。

一体どういうことか。質問した男性は、2回同じことを聞いたから「大変よくわかった」のだろうか。そうとは言えないと思う。最初に応答した担当者が女性だったから、だろう。だから、鼻で笑いながら発言するし、馴れ馴れしい言葉遣いをするし、説明内容をきちんと聞く気がないのだ。あるのは「女にできるわけがない」という、差別意識。典型的なジェンダー差別事案だ。

政権与党の副総裁は、自分の選挙区の集まりで女性の大臣について話題に出し、「俺たちから見てても、ほう、このおばさんやるね、と」と言い、「そんなに美しい方とは言わんけれども」と言った時、会場から笑いが漏れたという。女性を揶揄し、外見について指摘して笑いを取る。揶揄してもいい相手として、女性をあしらう。周囲は笑うことで同調し、差別を免罪する。同じことが、延々と繰り返される。

社会学者の江原由美子が、「強者・劣者関係においては、『からかい』はしばしば、攻撃や批判、制裁などの実際上の意図を持つ行為をつつみ隠すオブラートの役割を果たす」と指摘したのは、1981年だ（『からかいの政治学』『相補 女性解放という思想』所収、筑摩書房）。それから40年以上、女性たちは「蔑み」や「嘲り」を受け続けている。今もなお。

(ちゅうじょう ともこ／性差別問題特別委員会協力委員 長住バプテスト教会)

『学びの場の大切さ』～神学校にアンケートを行う意味～

今井 朋恵

鳥のひなが最初に見たものを親だと思い込むことがあると、聞いたことがありますか。これは、オーストリアの動物行動学者であるローレンツの提唱で、実際、ひなが最初に見た人間を親と思い込み、後を追いかけたという有名な話もあるようです。この現象を刷り込み（imprinting）と呼ぶそうです。

私は最初の絵の先生に「優等生の絵を描くな」「大きく描け」と、よく言われました。後に意味を実感し、絵画に限らず生きる上でも影響を受けています。1989年、西南大学神学部に入り驚いたことは、入学したばかりの私たち神学生に「あなたはどうか考えるか」と、対等の関係で先生に問いかけられたことです。専門分野の研究を掘り下げ、沢山の研究者と丁寧に議論を重ねてこられた先生方だからこそ、そのような心得を持っておられるのだろうと想像しました。

2024年度の当委員会の活動として、各神学校（西南大学神学部・九州バプテスト神学校・東京バプテスト神学校）にアンケートを実施する計画があります。具体的な中身の検討は、これからです。

対人関係に於いて「尊重」は重要です。神学校で学ぶ内容や環境、先生の関わりが学生に影響を与えることは、確かだと思います。学生の進路は様々と思いますが、教会から招聘を受け牧師になる、或いは教会・伝道所にて学びを生かす奉仕もあるでしょう。

性差別問題特別委員会の設置が提案されたのは、2004年度の定期総会です。提案理由の中に「性差別は重大な人権問題。この課題に取り組むことは、小さくされている者の解放を目指すイエス・キリストの福音の業である」と、あります。また、同総会で「性的少数者の人権擁護にも取り組んで欲しい」と複数の意見が出されました。連盟や教会の中に性差別があることを議場が認め、設置が決議され、2005年4月より活動を開始しています。「ジェンダーによる差別」や「セクシュアリティ（その人の生き方）に対する差別」に抗し、性差別のない教会や社会に向け平和を作り出すことを目指しています。教会は、いのちの現場です。聖書解釈や信仰理解によって、いのちと存在を否定する事はあってはなりません。世界に同じ人間が二人とないようにセクシュアリティは元来、多様なものです。全ての人が自分の人生を生きられるよう、私たちはこれからも「いのちの豊かさ」を発信し、皆さんと共に安全な教会や社会を作っていく事を願っています。

（いまい ともえ／性差別問題特別委員会委員 今治バプテスト教会）

名も無き者

岡田 富美子

沖縄の今

琉球弧のあちこちの島で自衛隊基地やミサイル基地の建設で人びとの心や自然がつぶされています。戦争は準備（沖縄は抗い続けている）段階からそういうものなんだと思わされます。株価の上昇にも影響しているかもしれません。沖縄では昨日 2 月 25 日から琉球弧の島で、「日米合同離島奪還訓練」（アイアン・フィスト“鉄の拳”と銘うって）が行われています。そんなに大きいニュースにはなりません。「きょうのガザはあすの沖縄」といわれ、沖縄戦を知っている方がたは、「いまのガザはまるで沖縄戦だ」と言います。逃げるのを阻害する、「壁」、「海」がある。地上戦。「南部へ逃げろ」という誤情報などで更に犠牲者がでる。「虐殺」。

いちばん弱い者

ガマフヤー（壕を掘る人）として先の戦争で亡くなられた方がたの遺骨を掘り続け、ご遺族に返すボランティアをしている具志堅隆松さんの話を聞きました。彼は「弱者の中の弱者は戦没者だ。なぜなら、声も上げられないから」と。まるで人でないかのように無差別に命を奪う戦争は弱い者から命を奪っていく。強奪、レイプ、放火、爆撃・・・自然を、木々を、大地を一人ひとりの体も尊厳もぶっ飛ばしてすべてを無くす。

多くの方々の声なき声を聴こうとして埋もれた遺骨を掘り続けているのかもしれない。「沖縄戦最後の激戦地の遺骨の入った土砂を新基地のため海を埋め立てるために投入することは人道上ゆるされることではない」と県内はじめ各地で、国会で、国連で訴えています。再び戦争を起こすわけにはいかない。「もし戦争を止められなかったら、わたしたちは『戦争させない戦争責任』を問われる」、と。

無名の礎

さきの沖縄戦で、韓半島、台湾、中国アジア各地から沖縄に強制連行された方がたが 1 万人とも 2 万人とも言われています。軍夫、慰安婦として。どこの誰が何人連れて来られたかという記録も今はなく、大田県政の時には、調査員を各国に派遣し、ご遺族に調査をしました。が、多くは、自分たちを植民地支配した国家によって連れて行かれ、人間扱いされず死んでいった同族の名前を刻銘することは屈辱だと拒否されました。24 万人の名前を敵味方、国、位（くらい）、性の別なく記した平和の礎ですが、刻銘されず、いまでも静かにたたずむ御影石がこの公園の片隅にある。その声に耳を傾けることが、名も無き者とされている性被害者に聴くことにも繋がる。

（おかだ ふみこ／性差別問題特別委員会協力委員 那覇新都心キリスト教会）

わたしのおすすめ本

杉山 眞弓

私は本を読むのが好きです。週に1～2回は書店にいきます。気に入った本を購入する時もありますし下見だけの時もあります。ネットでも手軽に購入することも出来て便利になりました。皆さん、最近はどうのような本を読んでいますか？キリスト教関連なのはお詳しいでしょうから最近発刊されたものでいいなと思う本をご紹介します。まずはコミックです。テレビドラマ化されているので御存知の方もいらっしゃることでしょう。

①『作りたい女と食べたい女』 ゆざきさかおみ著

ふとしたきっかけで同じマンションに住む野本さんと春日さんは出会います。詳しく内容を話してしまいますと読む楽しみが減ってしまうので深くは触れませんが2人の距離感が近づいていく過程に私にもそんな風を感じることもあるなど共感したり、教えられます。登場人物たちは出来事や出会いの中でそれぞれの抱えている思い、悩み、葛藤があります。それは私たちも自分らしく生きていこうとすると現実には在りあります。そんなことから身近に感じられる登場人物たちの食事の場面が印象的です。食事の場面の中で「たべものに直接問題を解決する力ないけど前をむいて考える力を与えてくれますね。」というところがあります。そのセリフにそうなんだって実感しますね。食べる行為が身体的に満たされるだけでなく心も満たされていく行為と再認識させられました。食べることは生きること。当たり前かも知れないけどわたしたちはちゃんと食べて生きているかな？一人で食べるのも良いですけど一緒に食べ、時間と空間を共有すること大切ですし幸せな気持ちに満たされますね。登場人物たちが自分らしく生きていこうとする姿に共感を覚えます。日常生活の中で自分自身の中にある刷り込みや思い込みがあると私も教えられます。私たちのすぐ近くに心の中にある本当の自分を表現出来なくて不自由さを抱えながら生きている方がいることをおもい巡らしてみてもよいかもしれないですね。

②『八月の御所グランド』 万城目学著

先日直木賞を受賞なので御存知のことと思います。賞を取ったからと普段から飛びついて読むことはあまりありません。当初は全く読んでみる気持ちはありませんでした。しかし著者自身の作中の登場人物にみんなが知っている人物が登場するとの言葉に私は誰？と気になり読んでみました。その人物について触れるとネタ張らしになるので気になる方は是非ご一読ください。内容は青春小説です。読後に感じたことはどんな場所であってもどんな時でもその人がその人らしく自由に生きていける世界であってほしい、そうなることを祈り続けていこうという思いを持ちました。これからみなさんがご自身のお気に入りとなる本に出会えますように。

(すぎやま まゆみ／性差別問題特別委員会委員 東山キリスト教会)

編集後記：岡山県に住むトランスジェンダーが、手術なしで性別変更を認めるよう申し立てたことについて、岡山家庭裁判所津山支部は性別変更を認める判断を示した。この結果は、生殖機能をなくす手術が必要とされる「性同一性障害特例法」に対して、2023年10月に行われた別のトランスジェンダーの審判で、最高裁がこの規定を憲法違反と判断したことに関係していると考えられる。これらの判断はセクシュアルマイノリティの社会における尊厳の回復ということについて大きな意味を持つ。「私は何者で、どのように生きるか」。人格と深く結びつく多様でかけがえのない「セクシュアリティ／性」が、一人ひとりの尊厳として大切にされるものであることを今一度心に刻みたい。(よしだなおし／性差別問題特別委員会委員 室蘭バプテスト・キリスト教会)